

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	村 : 小説
Author(s)	後藤, 壽夫
Citation	龍南, 182 : 1 - 26
Issue date	1922-07
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/7859">http://hdl.handle.net/2298/7859</a>
Right	

# 村

後 藤 壽 夫

村は、丘の根元にあつた。

三十ばかりの、藁屋根、泥瓦ぶきが、交り合つて、青い丘の根に、密集して居るのは、見るものに、醜い寄生虫の群を思はせた。

丘に登ると、すぐ眼の下に、市街の黒い家の連りが見えた。鐵道の分岐點で、内海の良港であるその市街が、空中に發散する煤煙は、海から這ひ上る風に乗つて、村の上に、硫黃の香を漂せた。

蜘蛛手に延びた、黒い都會の觸手の一本は、村の境をうねり、丘を割つて、更に南に走らうとして居た。その觸手についた吸盤のやうに、黒い壁の工場が一つ、村境ひに割込んで、褐色の毒煙を吐き、蒼白い、汚れた男女の群を、吸ひこんで、吐き出した。工場に隣接した、工場主の邸宅の、厚い白壁が、破れた障子の村人の家の數軒と對して、陽光の中で、強い一線を劃して居るのは、丘に登る人の、先づ眼につくことだつた。

丘は、段々畑で、生けて居る雜木——松、樅、くぬぎ——は、年々その影を消して行く。頂に近い、小松

の中の、美しい芝生になつて居た山腹やまはらは、村の小供の遊び場所だつたが、それも、去年開かれて、小麦が植ゐられた。

お久は、もう、可成勞れて居た。が、相手のお加代に力をそへて、尙、臼を廻す手は止めなかつた。さうだ、もう半分はすれたのだから！

春は、村をとりまいて居た。椿、溶けた白雲の漂ふ空、萌ゆる草の香、大氣の中に、大い點線をうつておちて來る陽光——その春の光は、お久達の居る、破れた小屋の壁に、黄色い影を浮かせて、廻る石臼の表にチリチリと反射した。

古い石臼が廻るのは、見る人には、氣持よいものだつた。こまやかにひかれた米の粉が、餘韻の長い、臼のひびきにつれて、黒蠟色の石の間から、絹の糸のやうに輝きおちる……………。

お加代は、さつきから、夫の仕事——鐵道の荷積み、濱仲仕などの日雇仕事が、不景色なので、毎日が思はしくないこと。それで、村の人のするやうな、こも編みの内職ばかりではなく、少しでも金になること、例へば、この粉ひきなどをやらなければならないことを、くどくどこぼして居たが、お久は、そうしたことよりも、今朝、街で會つた石田のお嬢さんの田鶴子のことが、しきりに氣にかゝつて居た。そして、お加代の愚疾の途ざれた時、思ひきつて口をきつた。

『石田のお嬢さんが、歸つて來たのを知つとるかへ？』

『俾でな。随分美しうなつて……それでも、わらう、つんとしとつた。』

『そりや、女子大學に入つとるんだから、私達から見れば、少しはつんとして見ゆるわな』

白は、ごん／＼廻つた。二人は、一寸、黙りこんだが、新しく米粒をつぎたしながら、今度は、お加代が口をきつた。

『吉村の操一さんも、歸るだらう。春の休みじやからな。』

操一、と言ふ名を言ひ出された時、お久はつきあげられるやうに、血が頬にのぼるのを感じた。すぐ、隣に住んで居る身なのだから、操一が何時かへるか、知らない筈はない。だが、明日の夕方かへる筈だと言ふその言葉がどうしても口に出なかつた。

『……』

『そら、もう一すり！、今手をゆるめてはいけねえよ！』

お加代は、遠慮なく、大きな聲を出した。やがて、粉がすつかりすれあがると、二人は、忙はしく立ちまはつて、白をかたづけ、眞白な米の粉を、袋にはかりこんだ。

夕まぐれて、市街の活動寫眞の奏樂が、風に乗つて聞え始め、村の褐色の障子に、十觸光がともつたころ町から粉を受取りに、老つた男がやつて來た。

『い、ね、たしかに、五升あつた。始めが二升三合、それから、二升と七合——なあ、お久さん。』

お加代は、相手が、どうしても四升五合と言ひはるので、すつかり腹をたてゝしまった。

『なんば、うちが貧乏して居るからと言ふてもな！うそと思ふなら、私の目の前で、はかりなほしてもいい。』と、いきまいたのだが、町から來た男は、糞おちつきにおちついて、結局、一升七錢の摺り賃で、三十二錢はらつて、他の家の粉を集めるために立ち去つた。三十戸たらずの村だつたが、昔からある石臼をもつて居るのを幸ひに、この男の米を摺らせて貰ふ家が、まだ他にも數軒あるのだつた。

『何とか、かんどか、難くせをつけて、一錢でも、二錢でも、かすりどつて行かうとしやがる。蓄生奴！』  
『まあ、仕方ないわな、今度から、すつて呉れど、言ふて來ても、すつてやらねば、それでいゝじやあないかね。』

お久は、眼を赤くして口惜しがるお加代を、靜かになだめながらも、自分もすつかり、涙ぐましくなつて居た。あんな無理をされて、こうして怒つて見るものゝ、すぐまたあの男の米を、奪ひ合ふやうにして、すらせてもらはなければならぬ自分達ではなかつたか！小作してとれた米や麥は、とつくの昔なくなつて、父の荷馬車稼ぎと、母の内職でたつて行く我が家の生活に、自分がこうして働いて、五合の米の料でも加へ得たとすれば、親子三人の、幸福は、どんなに保証せられるか！家の中の悲しい争ひは、「明日の米がない、」と言ふ時のにみ起ることを、お久はよく知つて居た。

それから、二人は相談して、その三十二錢に、いくらか足して、白米を一升買ふために、町の米屋に出かけに行った。

日が暮れて、月が出た。

村のあちこち——傾いた厩舎うまやのそば、崩れおちた土塀にそつた畑の隅などには、咲きこぼれる桃、葉になり初めた櫻、鳥の胸毛にも似た小さな葉を重ねた竹藪などが、夜霧に浮いて、暗い金色の暈かざを冠かぶつて居た。お久は、お加代と五合宛に分けた米の包みをもつて、砂利の代りに、石炭の燃えかすをしいた道を歸つて行つた。月は、この不思議に日に焦げない肌と、黒味勝ちなはずきりした瞳と、そして思ひきり貧しい身なりをした十七の娘の廻りにも、夜霧の黄金色の暈かざをかけた。

突然！道のわきの、竹藪の暗から、黒いかげが、おどり出た。お久はあつと叫んだ。米の包みがバサリと地におちた。が、お久の聲が、暗の中にひびくと、そのおどり出た黒い影は、びたりと止つて、そのまゝツツと泣き出した。その泣き聲に、お久は始めて、黒い影が、小さな子供であることに氣がついた。

『まあ、吉きちちゃんかね。どうしたの。』

すると、小さな影は、その左手を、お久の前に差し出して、更にはげしくなき出した。見ると、その汚れた掌には、小さく月の光を反射して、白い五錢銅貨が光つて居た。そして右手に握つて居るのは、一合入りの酒徳利に相違ない。お久は、總てのことがわかつたやうな氣がした。

——吉次は、お久の隣りの、傾いた土藏の中に、父と二人で住んで居た。工場から歸つて來たその父が、吉次が、晝の飯を、一杯餘計に食つたから、と言つて、はりまわして居るのを見たことがある。一日、米三合に麥四合。それが二人の定められた一日分の食料であつて、それ以上に出ることは決して許されないばかりではなく、一人が食べる一杯の餘計な飯は、直ちに一人の飢えを意味するのだつた。——

吉次の左の手に光つて居る白銅貨。右手の酒びん。酒屋のお婆さんの霞んだ眼——若し、この貧苦に魂を

傷けられた小さなお子の前に、一つの白銅貨が、酒屋の店先きで見出されたとすれば……。おゝ！そして、吉次が竹藪に入つたのは、その白銅貨をかくすためではなかつたか知ら！

お久は、この、白銅貨を握つて、竹藪から飛び出した子の、泣き入る姿を前にして、どうすることも出来なかつた。

滑りの悪い戸を開くと、母親が、待ちかねたやうに、聲をかけた。

『お若さんが、さつきから、待つとるよ。』

四枚の畳と、竹の根の出た土間と、黒い家具と——お久は、十燭光の下で、それらのものが、陰惨に浮いて居る中に、藁のこもを編む手を止めた母親の白い髪と、その側のかまちに腰を下した、なつかしい友の、木綿縞の小さな姿を見た。

『あゝ、お若さん！工場は？』

『わゝ、今晚は、夜業がなかつたの。夜になると、一人では出さぬけれど、監督さんに願ふて、やつと許してもらうて。』

『兄さんからは、便りがあるかへ。』

『時々。朝鮮の方は、まだ寒いさうな、選拔されて、あちらの師團に行つたのはいいが、おかげで、また一年満期がのびた。お前達も辛からうが、もう一年辛抱して呉れ、なんか、書いて來るわ。』

『お父さんは？』

『兄さんが、朝鮮の方にまわされたのを、皆んなが名譽だと言ふて呉れるし、新聞に、名前が出たりしたので、やつぱり嬉しさうにしては居るが、それでも毎日畑に出るのが、苦しうてならぬらしいの。ほんどうに兄さんが兵隊にとられてから、家の中のさびれかたのひどさ！。私が工場に出るやうになつたのも……だが、今になつて考へると、工場に出て居た方が、よかつたかも知れん。お父つあんも、兄さんが歸つたら、工場はやめさしてやるぞと口では言つて居るが、あの、楠の木のそばの畑を、私達には内証で、手ばなしたらしいのよ。』

『まあ！』

母親は、まだこもを編み續けて居た。畳の材料にするそのこもは、一日に四枚編めて、一つ十一錢で賣れた。

お久は、夕飯の飯臺を運びながら、かまちに腰をおろして居る、この小さな女工のお若と尙話を續けた。公園の葉櫻がいゝこと。休みの日に一日位遊びに行きたいのだけれど、一月に二度しかないその休みを、そんなことに費してしまひたくもないこと。工場で、此のころ來た王女の一人が、機械に巻きこまれようとして、死に絶へさうな物凄いい叫び聲を出したこと。工場の食堂に、大きな鼠が出て、テーブルの下を、チョコチョコ走つて、皆んなに、御飯をもらつてあるくこと。……

こうした話のあとで、ふと思ひ出して、お若が言ひ出した。

『ひうさう。私の工場の社長さんの、お嬢さんの祝言のこと知つとるの？』



『大きい方のお嬢さん——ねえ、すぐ披露があるさうな。』

『おむこさんのことも？』

『ねえ、法學士とか。』

『あゝ、あのなあ。』この時まで、一心にこもをあんで居た母親が口を入れた。『月があけたら、村の人たちだけに、内披露をすると、言ふて來た。その時には、お前、私の代りに行つとくれ。』

『さう。お母さん、行つたらどう？』

『何だか、あゝした家へ行くのは、氣が進まぬよ。』

父親が、荷馬車をひいて歸つて來ると、お若も、遅くなるからと立ちあがつたので、それでは、そこまで見おくらうと、お久も家を出た。

『まあ、美しい！』

お若は、家の中の陰鬱な薄明りから、戸外の月光にひたつた時、一も二もなく、讚歎した。

高い、ぼんやりかすれて、それでも不思議な深さの感じをたゞれた夜の空から、月光は、輝きおちた。その下で、村の家が、小簀が、土塀が、葉櫻が、一様に白銀色のぼかしをつけて静まつて居た。

『こんな晩は、一人で、どこまでもどこまでも、ずつとずつと先きの方まで、歩いて見たいような氣がするの。』

お久も獨り言のやうに言つた。

それから、暫くの間、二人はだまつて歩いた。二人の影は、やわらかい絹の布のやうに、地の上におちて二人の後をすすつて行つた。

『お久さん！』

お若がふと口をきつた。

『どうしたの？』

『あの、吉村の操一さんは何時かへる？』

『わ？！』

『吉村の操一さん。』

『あの……よく知らないけれど、お母さんの話では、明日だとか。』

『社長さんのうちの、小さい方のお嬢さん、田鶴子さんは昨日歸つて來た。女子の方が、男子の大學よりも早いのだ。』

『操一さんの方も、大學は早くすんだのだけれど、途中神戸とかに寄つたので、少し遅くなつたつて。』

『何をするのに？』

『何とか、あの神戸のストライキを見るときか。』

『さう。そんなことをせずに、早くかへればいゝのに、田鶴子さんが待つてるだらうに。』

『さう。』

『そうして……』

『わ！』

『お久さんも待ちかねて居るかも知れないこと。』

道が、簾かげにさしかつて、やわらかな暗が二人を包んだ。そして鐵金具の黒い工場の門がすぐ眼の前に近づいて居た。

『まあ、そんなことはないの。そして、操一さんは大學生だし、田鶴子さんも、女子大學に入つとるし……。お若さん。そんな話でなくにネ、私、まじめな相談があるの』

『まじめな?！』

『わゝ、あの……お母さん達には、まだ内証だけれども、私、工場に出ようかと思つて居るの。』

お若の顔が、悲しく曇つた。眼を見はりながら、聲をおとして囁いた。

『それはほんと?。わ。だが……、ね今晚はもう……お久さん、さようなら。お見送り有難う。』

小さな工女の影は、つと、鐵金具の門に吸ひこまれた。小門の扉が、ガン!としまつて、お久は、月と夜霧の中へ獨りどりのこされた。

## 二

工場主、石田家の、村人への婚禮内披露の日、お久は、その家の臺所で膳立てに手傳つて居た。

外界は、深い春で、明り窓から流れこんだ陽の光は、お久の洗ふ皿の表に音もなくくだけて、洗ひ水の中を、白く照した。臺所の廣いたきと、明るいその建築法は、井戸ばたや、じめじめした土間のすみで、炊

事することになれて居るお久に、全く違つた、樂しさに似た感じをさへ、こうして働くことに對して、いだかせるのだつた。

座敷からは、もう可成酔のまわつた村人のざわめきが聞かれた。女達は、新しい簞子に入つた、婚禮着を拜見させてもらつて、その大袈裟さと、美麗さに、讃稱の聲をあげてゐた。

『お久さん！』

工場に續いて居る庭の方で、突然聞きなれた聲がした。

『ヤラ、お若さん！』

お久は、急いで、皿を洗ふ手を止めて、その黒い工場服をつけた友達のそばに走りよつた。

『どうしたの、お皿なんか洗つて？今日はお客さんじゃなかつたの。』

『でも、あの臺場のお婆さんが、一人でせつせと働いて居るのですもの。座敷などで、がやがや言つて居るのもいやでしたから、あゝしてお皿洗ひの手傳ひをして居たところ。……そして、お若さんは、今お休み。』

『いゝね、一寸小用に出たところ。お久さんの姿が眼についたので、聲をかけて見たの。』

『お休みはない？』

『朝の三十分と、お晝の三十分と。そして夜業がある。』

『縣廳のお役人は？』

『来るのは来るのだけれど、いつも監督さんや、社長さんのところで、お茶をのんだだけで歸いてしまふわ

工場法なんか、あつてもなくつても同じこと。』

『まあ、ひどい手をして居ること。お若さん、痛くはない？』

『仕方がないんですもの。工女は、皆、繭の毒で、こんな水死人のやうな手になつて、白く割れて、赤い身から、血がにぢみ出るのだけれども、これだけには、薬もないつて。自分ではあきらめて居るんですけれど、人前には出せないし、そして家に歸つた時などに、痛くつて炊事が出来ないのを、近所の人などに、工女は、皆飯もたけないのだから、嫁には貰はれぬなど、悪口を言はれたりするのはつらいこと。』

『ほんとにネ。……だが、自分で働いて、家の人を助けることの出来るのは、氣持よいことだと思は……』  
『さうさう。お久さんは、この前の晩、門の前で、工場に出たいと言つたつて。あの時は、私はびつくり

して、何も言はずに逃げたけれど、實のところ、出来るなら、——ほんとに出来るなら、工場には來ない方がいゝ。こんなことは、まだ話さなかつたけれども、始めの三ヶ月なんか、まるで、下働きの下女のやうな仕事をさせられる。社長さんのうちの子守りまで……。それから、新工女と言つて、工場の中の雑役をつとめるのが、三ヶ月ばかり。その間の辛さ……色々話しておれないわ。そう、あそこから、監督さんが、にらんで居るでせう。こんなことが、三度もあると、精勤賞——一圓三十錢がもらへないの。そしてネ、私達、いくら頑張つても、絲のとり高が、一月十圓とあがらないの、無論御飯は、こゝで食べるのだけれど……そらまだにらんでるわ。さようなら。』

お若の黒い小さな姿は、工場の硝子戸の中に消えてしまつた。春の光は、その硝子戸にも、華かに散つて居たが、内部は暗くて、たゞ、機械の回轉が、それも氣配<sup>けいはい</sup>だけ、感ぜられた。

お久が、臺所にひきかへさうとした時、ふと、晴れやかな笑ひ聲が、座敷に連つた、丁度今、お久がその前を通りかゝつて居る部屋から聞えて來た。これは、美しい丸窓のついた、築山に面した明るい障子の部屋で、話の主は、二人とも、お久たちとは、まるで異つた風をした若い女で、その一人は、たしかに、田鶴子だつた。くゞりあごの、大きい眼の一口に言へば、貴族的の風姿の彼女は、強い紫色の着物をきた相手と、お久とお若の會話とは、正反對の調子で話して居た。

お久は、急に立止まつた。どうしたわけだつたか、自分にもわからない。たゞ身体がひきしめられるやうな、不思議な氣がして……。

彼女達の會話は、ひとりでにお久の耳に入つて來た。

『さうです。ワグネルの「Talent」は、私も認めます。だが、デビツシーの手法の方が……』

『デビツシーを嫌ひだとは、言ひませんわ。でも……』

『まあ、バラと、フリジャの美しさを較べるやうなお話は、此の位ひでとめておきませう。それにしても、貴女はもう随分お書きになるやうになつたでせう。油の方？』

『まだまだ、ほんとに駄目なの。オットマンなどの、あの色彩の光響樂や、日本ものでも、劉生などを見ると、すっかり壓倒されて、手も足も出なくなるわ。』

『おや、たいそうな賑かさネ。何のお客さん。』

『姉さんのお祝ひ。お父さんが、村の人に御馳走してあげて居るんですよ。』

『村つて？』

『そう、その塀の向ふに見ねるでせう。三十戸ばかりの人間の巢——あの中で、人間に似た動物が、人間に似たつもりで生活をして居るのですよ。』

『まあ、ひどいことを。』

『でも、あちらから、休みなどに歸つてきて、こうして窓から眺めて居ると、まるで私達とは異つた世界を見るやうな氣持がするんですよ。人間以下の生活！そう、そこに見ねる黒い藁家、壁のをちた。あの中にも人間が、而も四人住んで居るんですよ。夫婦と、老つた婆さんと、四つばかりの女の子。』

『亭主は、小さな、ニグロみたいな身体つきの男で、日傭稼ぎで、私の家の庭掃除などにも時々來ます。それが少し、白痴に近くつて、それで居て、折々酒など飲んで來るのを、しつかりもののお神さんが叱りつける、女の子をつかまへて、こいつは俺の子ではないとわめく。何をと、いがみかへす。小供がわつと泣く。』

『それに、お婆さんが、老衰で、腰がたゝなくなつて、寢て居るが、御飯を食べれば、糞をもらすので、部屋の隅みにおいたまゝ、ほんのちよつびり、おかゆをあてがつて居る——死ぬるのを待つて居るのですネ。そのお婆さんが、おゝ、おゝ、何か食べさして呉れね！と泣くやうに叫ぶ、それがまた夫婦の間の争ひの種となる。ネ貴女、争ひの種ばかりではなく、創作の種にもなりさうネ。』

『まあ、ひどい。それで貴女、可愛さうだとは思ひなさないの！』

『はゝ、そんなと思はないこともないのだけれど——ドストエフスキーなどを讀んで居る時は、貧民の生

活に對する、あの作者の大きな愛を充分知ることが出來、同感も出来るんですか、こうして、彼等の生活を眼の前に見て居ると、不思議に、嫌惡の情だけしか湧きませんわ。まるで獸同士のいがみ合ひ、——いがみ合ふために生れて來て居る人達で、人間らしいところつて、爪から先きも見あたらないわ。同情も愛も、やつぱり人間と人間との間より外に起り得る感情ではないのよ。』

『ほんとにそう思つて？、随分な批評振りだが。』

『批評は、智的動物としての人間にゆるされた、一つの特權ですわ。あんな人達に、ワグナーを興へ、劉生を味はせようとして御覽なさい。それよりも、お米を一升！ときつといひますよ。オホ、。』

話が、とぎれた。

お久には、その話のうちで、解からないところが澤山あつたが、話の中の夫婦のことは、よく知つて居た。二人が、どんなに一生懸命になつて、苦しみ働いて居るか——どんな仕事もいとわずに、亭主が日雇に出て行くと、お神さんは、家の小庭を耕して、野菜を太らせた。山かげの、石ころばかりの地を譲りうけて、畑にしたのも、そのお神さんだつた。お婆さんは、あんなに弱つて居るのだが、醫者は決して來て呉れない。それでも、亭主の方が、仕事の歸りに、藥屋に立寄るのを、時々見る。働いて働いて、そして、やつと生きて居る。その人達の生活を、お嬢さん達は、人間以下だと言ふ、獸見たいだと言ふ。だけど、私は、あの夫婦達が、村でも氣持ちのいゝ人達であることをよく知つて居る——

お久には、お嬢さん達に、どんなわけで、あの夫婦が、まるで罪人のやうに見わるのかが解らなかつた。



誰があけたのか。座敷と、台所との間の襖が、開きばなしにされて居たので、村の人達の、高笑ひ、高話しが、皿を洗つて居るお久の耳にも、遠慮なく流れこんで來た。

『なあ、おい！豪氣なもんじゃねわか。一寸内祝ひだと言ふのに、この接待ぶりは。本式の祝言だつて、こんな馳走はあるめね。金持ちにはなりてねもんよ。』

『ほんとになあ。俺なんか、高公の祝言の時この方、馳走の名のつくものはねつから口にしたことがねえよ。』

『さうだ。高公と言やあ、可愛さうなことをしたな。親子三人、土の下敷とは……』

『あれもな。あの大きな身代をすりつぶして、親子三人で、村を出て行く時——それも三年前のことじゃつたが、流れ流れて、筑前とかの炭坑で、坑に入つたまゝ、親子三人おし殺された！なあおい。』

『うん、一杯ついでくれ。それにしても、このころの村の淋れかたはごうだい。見ろい！俺達の若けね時、一軒に幾段、まがりなりにも持つて居ねえ家があつたかい。今じゃ、何段どころか、自分の田と名のつくものをもつて居る者が何人あるか敷へて見い。俺達の若けね時、村で、誰一人荷馬車をひくものがあつたか！日傭とりに行くものがあつたか！工場に出る娘があつたか！町の米屋に米買ひに行く家があつたか。百姓が風呂敷さげて、米買ひに行くなんて、……うん、人事じやねえよ。』

『それにしても、この大將よ。工場が出來て、十年となりめねが、めきめきせりあげたこの身代、高公の奴が、困り抜いて、ごうぞと差し出す田地を、おいそれを買ひとる豪氣さは、ごうしたとかい！』

『さうよ。金持ちにはなりてねものよ。それにしても、村だつても、長くじつとしては居めねえよ。さうだ

い。あの吉村の操一は、縣から出た金で、ちゃんと大學に行つて居るじかないか。』

お久は、思はず聞き耳をたてた。

『いけねね！操一もいけねね！あいつは、村から出た大學生で、感心者の評判が高けねが、聞けば、刑事につけられて居るさうじゃねえか。』

『刑事?!』

『今、おはやりの何とか主義よ。あゝして偉者の名は高けねが、どうしても生れが生れなので、ひがみ根性を出すのだらうて、こゝの大將も言ふて居つた。長ねものにはまかれるだ。貧乏はして居ても、じつと辛抱してをれば、こうした馳走にも、ありつけるつてわけよ。ハハ！』

『じゃが、刑事がついたからと言ふても、こゝのお嬢さんは、まさか、思ひきりはすめねな。』

『末娘かい。』

『さうよ。』

『ハハハ、操一の奴も果報ものよ。貧乏人の子のくせに、金もちのお嬢さんに思はれて。』

ガチャリ……皿が割れた。お久の手の皿が割れた。

『お久さん、ごうした。ぼんやり考へこんで。』

『なんだそそをしました。つい……』

『いゝや、その皿は、われてもかもわれないが、おかげで、助かつた。もう洗はないでいゝから、お座敷の方でも、休んだらいい。』

手傳つてやつたお婆さんから、こうして、優しくされたことが、何故か、つい涙がこぼれさうにうれしかった。

破れた皿を片づけて、お久は座敷の方へ出ようとしたが、どうしてもその氣になれないのだつた。

その夜も、美しい月夜だつた。

夕餐を御馳走になつて、石河家の門を出る時、飼犬のセッター種が、吠へついたのが、身震ひする程恐しかつたのだが、村境に入ると、お久は、すっかり好い氣持ちになつた。

夜、ことに月の夜程、この村が美しく見ねることはない。薄絹の彼方に、金色のざぼんでもおいたら……と思はれるような月が、透明なオルトラマリーンの布のあちこちに硝子玉の星を散した空の中ほどに浮んでその下に、紙細工の片面黒像シルネグエツトとなつて、村の家々が、樹々が、小藪が、静まつて居る。

お久の足は、ひとりでに、山の方に向いた。こうした夜を、このまゝ家に歸へるのは、ほんとに惜しいことだ！

岡の麓には、夜氣をおびた暗が漂つて居た。頂上に、萌々出る草の芽のやうに、細々とした線を見せて生ゐて居る小松と小松の間をうづめて居る空の色が、ことに美しく思はれた。が、小溝にそつて、杉の木立ちをまわつた時、お久の足は、びつたり止つた。春の夜の静寂に醸もされたその氣分が、すっかり壞されて、小さな胸の中に、熱湯に似た苦痛の感が、狂ひ始めた。月の影に見た二人の影——男の頬を、かつきり照し出したその月影は、同じく女の膝の上で、青く澱んで居た。

お久は、兩足が動かない！二人の坐つて居る草原からは、無論お久の姿は見えないけれど、二人の話は、お久の耳に、無慈悲にも流れこんで来る。

『私には、貴方の言ふことがわかりません。そんなことが、どうして私達の戀にまで影響させよう！』

『するから不思議なのです。まあ、お聞きなさい。僕の友達の若い労働者が、こう言ひました。ミレーの畫のすべて、ことに晩鐘などを見ると、癪にさわつてならぬ！』

『あの『晩鐘』が、どこまでも生活苦を問題外においた繪だ。食ふ心配のない繪だ。自分の周圍だけに、美しい世界を作つて、嬉しがつて居る、あの畫家の態度が、きらひだ。彼の出た時代は、あのフランス大革命の、民衆のうめきが、地表を破らんとする時代ではなかつたか！とその男は、何故だ？と問ひかへした私に答へたのです。』

『それが、藝術に對する見方と言へるでせうか。それは、少しもミレーを理解しない言葉ではありませんか』ミレー自身が、如何に窮迫のどん底に居たか。そして、そこに生み出された彼の藝術が、如何に深い……』

『そこで！私の言ひたいことはそこです。成程、貴女はミレーを正當に理解する。彼の生み出した藝術の前にひざまづき、陶醉することが出来る。ところがその同じミレーの繪が、何故、労働者である私の友に、反感より外の何物をも起させないのでせう！そこが問題です。一つのもの——その一つのものが、貴女と言ふ人間には、陶醉をあたへ、私の友には反感を起させる。貴女は、金持ちのお嬢さんであり、私の友は、労働者である！』

『それは、あまりに人間を概念的に取り扱ひすぎた見方ではないでせうか。人間苦も、人間愛も没却した

見方です。』

『おまちなさい。貧乏人は、そうした、概念とか、人間苦とか愛とか言ふ、言葉使ひにさへ反感を起しますよ。貴女には——貴女のような境遇にある人には、「食ふ心配」は決して理解出来ないのだ。ミレーを理解し、ワグナーを讃禮することが出来ても、生活苦——日夜、地上幾億の貧民の生存そのもの、たゞ單に生きて行くと言ふことそのことを、脅かしつゝある「食ふ心配」の恐しさを理解することは到底出来ないのだ！』

『この事實——貴女のやうな境遇の人には、人間愛がわかり、人間苦がわかつて、生活苦の恐しさが、どうしても解る氣づかひないと言ふ事實が、世界を二つにわけるのです。同時に、この事實が、貴女と私の戀をその終局にもつて行く理由なのです。』

『いゝね、それは信じられません。私達の戀にまで、そんなことが關係しようとは決して思へません。私達は……そうです、私が女學校の時から、貴方が、中學校に居る時から……』

『大の仲よしだった、甘い戀仲だった。だが、今は！人間の社會を二つにわける力が貴女と私の仲をも、おちさいてしまった。たつた一つの事實に眼をつぶつたら、私と貴女との戀は、或る處までは、續けて行けるでせう。だが、その一つの事實が、どうして動かせない根をもつて居る。早い話しが、貴女と私の物の見方がすべて反對だ。貴女のもつて居る思想は、私の思想の敵だ！』

『そんなことがいゝね、そんなことはありません！』

『ゾラの『芽月』を読んで、貴女はその中で、労働者のつけあがりを見たと言つた。私は……』

月が影つた。輝く白紗に似た白い雲が、その表を蓋ふたのだ。女は下を向いて居た。その肩の曲線の上に

男が、この時片手をおいたのを、お久は杉の暗から見た。

『戀は少くとも貴女達の間では、人間のもつて居る寶石でせう。二人は、今抱き合へば抱き合ふことが出来るやうに思へるでせう。だが、僕は、その二人の抱擁をはばむ或るもの、我々の寶石をもうちこわす或るものが、現在僕と貴女の間動ききつゝあることを、認めずにをはれないのです。』

『私には、貴方の言ふことが解りません。』

『さうです、わからないのがほんとうです。戀の寶石は、貴女達の階級の中では、いつまでも完全に保もたれて行くでせう。だが、僕達、貧乏人の間では、とつくの昔、なくなつて居る。多分、奪はれたのでせう。』

『貴方は、貧乏人、貧乏人とおつしやるが、幸福は、かへつてその人達の中にありはしないでせうか。終日、土に親んで、山の赤い松の幹の間から、星空が浮び出る頃、鍬をかたに、歸るその家には、健康な母と、子が、夕餐の膳をととのへてまつて居る。こうした情景は、却つて村人のみのもつ特權ではないでせうか。』

『それは、ピアノの鍵盤に散る月影に眼を細めて、印度更紗のカーテンの影で、詩集をひもどく人の言ふことです。』

二人は、だまつてしまつた。月は、白紗のヴェールをぬいで、再び青い液体を二つの影——この、且つて戀人であつた、田鶴子と、操一の上に澱ませた。

二人のむづかしい會話を、無理にも聞いて居らねばならなかつたお久は、二人の間にこの沈黙が來た時に、自分は、こゝを去らなければと思つた。

家に歸ると、母親が訊ねた。

『お前、何だか嬉しうにして居るな。何か好いことでもあつたのかへ?』

お久はびくつとした。そして杉の影で聞いた會話の、どの部分が自分を嬉しくしたのか、と考へて見たときに、恥かしい感じがした。

### 三

お久は、臼を廻して居た。破れた例の土藏で。(さうだ、今日中に、この二升を摺りあげてしまはなければならぬ)

それにしても、この一週間ばかりの短い時間は、何と言ふ暗い影を我が身の上に廣げたのだらう! 私は不幸者だ! 缺けた月影の白さを見て、ほんとに死にたいと思つたのは、昨夜のことだつた。お、お父さんのあの怪我——)

——積みあげられた、陶土製土管の、一つが、グワラツ! と轉げおちて、その下に働いて居た、老いた荷積人夫をおしたふした。へしおられた左の足! 折れ目ににじんだ黒血の色より、その人夫の顔の苦痛の色の方が、見るにたへない悲惨さだつた。——

足をおつたお久の父は、もう五日をうなり通した。風の臭い小屋の隅で。命はとりとめても、一生の不具です——それが醫者がお久母子に與ることのできた、唯一の信用出来る言葉だつた。

(お、さうだ。この二升を今日中にすつてしまはなければならぬ!)

小屋の中から、白を廻しながら眺める眞晝の村は、一つの萌に出づる奇怪な植物の芽の如く、太陽の光を吸ひこみ、照りかへして居た。緑の小藪、黒い屋根と屋根との間の、麥の畑、その上を流れる強い土の芳香、それらの總てに、黄金色の花粉をふりかけて居る眞晝の光。

お久の胸にも、ある輝く希望がさしこんで來た。(さうだ！私は工場へ行けるのだ。昨夜、一生懸命に願つたので、母もそれを許してくれた。どんなに苦しくつてもどんなにつらくつても、この私の腕で働けて、お父さんと、お母さんの生活に、何かの餘裕をもたらしことが出来る)——お久の小さい胸は、喜ばしい鼓動にふるへた(働ける。自分の腕で働ける！どんな苦しみもどんなつらさも、お、そんなことは、何でもないので。)

するとその喜ばしいお久の空想の中に、急に一つの小さな足音が飛びこんだ。小さな足音——(オヤ、吉ちやんだ。どうしたのだらう。あんなに、息切れがする程走つて、眼の色までかへて……走つて來る。)

小さな吉次は、息をきらして、お久の前で止つた。そして、きゝとれないような早口で言ひ始めた。

『お若ちやんが、大怪我！仕事場の回轉棒に、髪の毛がまかりついたのを、びつくりして、兩手で棒にだきついたもんだから、火夫が驚いて機械を止めた時には、手がへし折れて居たつて……』

お久は、もう、聲が出なかつた。

月は缺けて居た。

春が過ぎて行くのだ。櫻は、その縮れた葉をのばして、月の中に濃い影をうかせ、地の上には、夜霧に代つて、或る透明な冷氣が漂つて居た。やがて、白金色の初夏が地上を統べる——。



お久は、自分が、何時のまにか、丘の麓まで来て居るのに驚いた。眼をあげて見ると、頂きの、小松の上に、半ばかけた月が、魚の鱗に似た雲をかぶつて、灰色に光つて居た。

（お若さんが死んだ。兩手を折られて、左の頭蓋をくだかれて、醫者の來るのも待たずに死んだ。晝、私がかけた時には、もう、死体の上に晴着の襦袢が掛けてあつた。靜かに死んで行つた人々の死は、その人の地上から姿を消したことが、はつきりとつかめず、その人の死と、その人の殘像とが交錯して、不思議な感じをもつて來るのだが、あゝした悲惨な死に工合を見ると、頭に殘るのは、その人の永久の消滅と言ふことだけ。）

お久の姿は、段々丘を登つて行つた。何と言ふ生氣のない月の光だ！

（お母さんは、あんな、人喰ひ工場には、決して出しはせぬぞ、と泣いたが、やつぱり、私は工場に出なければならぬだらう。お父さんは、あゝして毎日うめいて居られる。このまゝして居ては、私達にせまつて來るものは、餓ねばかりである。その恐い餓ねを、私の腕で撃退出來たら、そんな嬉しいことはない。そうだ、私は工場に出よう。出るのだ！）

道が曲つた。

（あの小さな吉ちゃんでさへ、町の工場に出ると言ふ。あれは、あの親父が無理に働きにやるのだが、私の方は、こちらから進んで働くのだから、尙いゝわけだ。）

お久は、何時の間にか、山の中腹にたどりついて居ることに氣がついた。露の色と、土の香氣と、夜氣の冷さが、草原を包んで居た。お久は何時かの夜、杉のかけから見た、二人、操一と田鶴子の坐つて居たのはこ

ゝだつたと思ひながら眼をあげた。

空は、恐しい程低くて、動く雲が、丘の上の木に、ひつかゝりはすまいかと危まれる。そして草原の上を風がわたる度に、かすかな硫黄の香、多分、工場の煙のそれらしいのが漂ひ流れた。

ふとお久は、その草原の向ふの木蔭に人のけはひを感じた。と同時に、黒い大きな影が月をあびて現れて来た。お久は立ち止まつた。操一さん、さうだ操一さんだ！

が、黒い影は、お久の躊躇に頓着せず、大きな足ざりで、近づいて来た。

『お久さんですネ。いかに黒つばい月ですよ、今晚は。』

お久は、男の強い体臭と、肉体そのものゝけはいを身近くに感じた。

『お父さんは？少しはい、ですか。そして貴女は、愈々工場へ出る？……出るんですネ！さうです、僕等お互ひは、随分永く、或は死ぬる迄苦しまねばならないでせう。』

お久の手は、何時の間にか、力強い掌の中に握られて居た。それに氣がつくと同時に、小さきみな身震が身体中をゆすり始めた。ほこる眼を、草の上におとすと、二つの影が重く合つて居るのが、くつきりと黒く眼に入つた。

『お久さんのやうな少女達、この村のやうな村、それが数へることの出来ない程、僕等の眼の前に在ることを知つて居るので、僕はじつとして居ることが出来ないのです。』

操一は、静かにお久の手を離れた。自分の手のすべりおちるのを、感じると同時に、お久は、我が前に立つて居る操一の姿が此の上なく大きくなつたやうな不思議な感じにうたれた。

『さようなら！お久さん。僕は明日東京の方へ行きます。身体に氣をつけて。さようなら！』

操一は、近づいた通りの、大きな足ごりで立去つて行つた。そしてその姿が、小經角で消ねると、急に立つて居る足もとの蔭がくだけたやうな氣がしてお久は草原の上に身をなげた。

黒い月、丘のもとの村の上に、緑の孤を書いた草原、その草に寝て、泣き入つて居る、貧しい少女の打震ふ肩の上を、春から初夏にうつる夜の風が、音もなく渡つて行つた。

夜の村は平和だ。村は平和だ。黒い月の影に、青く和いだ村の上に、銀鼠色の工場の煙が、美しくなびいて居た。(終)(一九三二、五、二四)